



No.41

UT University Forests News

科学の森ニュース

Mar 10, 2008

発行：東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林

大人気のお祭りです～東大演習林影森祭～

秩父演習林

2007年12月9日に行われた影森祭も今年で3回目。周辺にお住まいの皆さんは開始時間前から「何時から?」「もう入っても良い?」など、開催を待ちわびていた様子。とてもうれしい反応です。

さて今年は、恒例となったミニ門松、リース、クラフト作り、木登り体験のほか、演習林でとれた材を利用したターザンロープや影森苗畑のシンボルともなっているヒマラヤスギを利用したブランコ、クイズ形式の場内めぐりにも挑戦。お馴染みとなったグルーポ・ティエラによるフォルクローレの演奏や秩父演習林サポーターによる餅つきも、祭りをいっそう盛り上げてくれました。

皆さん 2008年の影森祭も楽しみにしていて下さい。



そお〜れっ つきたてのお餅は美味しいよ

「科学の森ニュース」のバックナンバー（PDF形式）は東京大学科学の森教育研究センター（演習林）のホームページからダウンロードすることができます。（<http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/>）

公開講座 親子でふれ合う「秋の里山散策会」

愛知演習林

愛知演習林と犬山市が共催する初めての野外体験型の公開講座が2007年11月18日に犬山研究林で開催されました。犬山市内からだけでなく、近隣の市や町から38名もの皆さんに参加していただきました。

最初に芝野愛知演習林長から挨拶と講義があり、いよいよ森林内の散策です。森の中を歩きながら、森林に関する説明、丸太切り、ちょっとした木登り、土の透水および保水力を知る実験（写真）などを行いました。

なお今回の公開講座は犬山市エコアップリーダー東大演習林グループ（ボランティア）の皆さんに講座の内容、準備、当日の案内など全面的な協力をいただき開催されました。



「森の土ってすごいだ〜！」（写真提供・エコアップリーダー）

ニホンジカの生息数調査

千葉演習林

2008年1月10、11日の2日間、1986年から継続しているシカの生息数調査を延べ77人で実施しました。調査面積は3ヶ所で618ha、発見頭数は40頭、重複個体を除いた推定生息数は35頭、千葉演習林全体の生息密度は5.7頭/km²と推定されました。1995年から有害獣駆除を開始してから、生息密度の低下が見られますが、シカによるスギ・ヒノキ植栽苗への食害

や天然林における下層植生の減少や樹種構成の変化が見られるため、演習林内におけるシカの生息密度の動向を的確に把握することは、健全な教育研究林の育成管理や、周辺地域全体の環境保全にとって極めて重要です。しかし、調査には多くの協力者が必要で、今回も学生をはじめ、ボランティア会、NPOなどからも2日間で延べ28人に協力していただきました。今後も調査者の安全を第一に、精度の高いデータの収集に努力する所存です。

シンポジウム「南伊豆の風景探し」

樹芸研究所

シンポジウム「南伊豆の風景探し」が南伊豆町中央公民館で開催され、町内や近隣から約100名の参加者が集まりました。このシンポジウムは、静岡県と県内大学機関が進めている“特徴ある自然景観を生かした伊豆地域の地域振興”イベントとして開かれました。

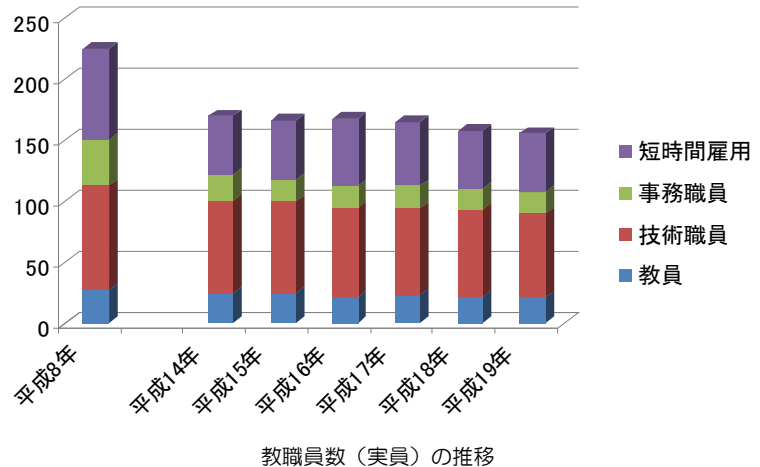
まず、シンポジウムに先立ち、参加者から「私の一押し写真」と題した5枚の風景写真を提供してもらい、それを解析した東京大学農学生命科学研究科の下村教授による「南伊豆における風景的特徴と地域の魅力」と題した講演が行われました。続いて各分野の4名のパネリストが個性的な地域づくりや今後の南伊豆の風景の保全活用に関する手がかりについての話題を提供しました。参加者たちは、意見交換に熱心に耳を傾けていました。



会場の様子

今年度、「将来計画 2007」をとりまとめました。その全文を演習林年報に掲載するとともに、冒頭には要点をまとめていますので是非ご覧ください。

こうした将来に関わる計画は、これまでも折りにふれて検討されてきました。今回の「将来計画 2007」もその一つですが、その背景には演習林を取り巻く環境が大きく変化してきたことがあげられます。その一つは、図に示すとおり、演習林を運営管理する教職員や運営費が年々減少し、従来通りの運営管理が難しくなってきたことです。その一方で、演習林に求められる役割に変化が見られ、大学における教育や研究のみならず、地域や社会からの要請にも応えていく必要が出てきている点も指摘されます。つまり、従来に比べ限られた人員と予算で、これまでの業務に加え新たな役割を担うことが求められているといえます。



大変難しい課題への対応が求められているわけですが、よく言われるよう

に、この難局を新たな演習林を創出するためのチャンスと捉えねばなりません。つまり、大学における教育研究の実施および教育研究のためのフィールド提供と支援という本来の役割への対応を再検討し、その質を高めるとともに効率化すること、そして社会貢献という新たな要請にも対応し、これまでとは別の役割をも担っていく組織にしていく必要があります。そのためには、現状を冷静に分析しつつ、皆さんで活発に議論し、目標像を共有していくことが不可欠です。「将来計画 2007」はそのための材料を提供したいとの思いでとりまとめたものです。是非、ご意見をお寄せください。

演習林のイベントダイジェスト 詳細はホームページをご覧になるか、各演習林にお問い合わせ下さい。

11月(2007年)

- 3, 4日 木が香る秩父フェスティバルに参加(秩父)
- 3, 4, 10, 11日 ワサビ沢展示室特別開室(秩父)
- 4日 子ども樹木博士・休日一般公開(田無)
- 11日 公開講座「鳥の巣箱作りと観察」②(愛知)
- 15日 天津小学校6年生 職場体験(千葉)
- 17日 大滝げんきプラザ共催事業「紅葉のトロッコ軌道に秋を訪ねて」(秩父)
- 17日 全学体験ゼミ「都市の緑に学ぶ」②(田無)
- 23, 24, 25日 秋の一般公開～紅葉の猪ノ川渓谷へ～(千葉)
- 23日 休日一般公開(田無)

12月

- 1, 2日 秋の一般公開～紅葉の猪ノ川渓谷へ～(千葉)
- 1～2日 全学体験ゼミ「年輪を読む」(富士)
- 2日 公開講座「落ち葉の下の生き物たち」・休日一般公開(田無)
- 3日 稲穂小学校第2回森林教室(樹芸)
- 8日 公開講座「野鳥の巣箱をかけよう」(千葉)
- 8日 総合科目「冬の森林学」日帰りコース(秩父)
- 8日 公開講座「鳥の巣箱を作ろう！」(樹芸)
- 8～10日 第20回日本の森と自然を守る全国集会(愛知)
- 15日 全学体験ゼミ「都市の緑に学ぶ」③(田無)
- 15～16日 総合科目「冬の森林学」宿泊コース(秩父)

1月(2008年)

- 19日 静寂な東京大学の冬の森を歩こう～森の動物・植物の冬芽～(千葉)

2月

- 3日 森林博物資料館公開(千葉)
- 4～7日 森林管理に係る安全衛生講習(広葉樹伐採作業)(千葉)
- 18～21日 全学体験ゼミ「森林の炭素固定機能を検証する」(千葉)
- 19～22日 全学体験ゼミ「伊豆に学ぶ1」(樹芸)
- 26～29日 全学体験ゼミ「伊豆に学ぶ2」(樹芸)

3月

- 9日 公開講座「マツ枯れ跡地に一緒にマツを植えませんか」(愛知)
- 11～13日 全学体験ゼミ「雪の森林に学ぶ」(北海道)

4月

- 5日 公開講座「野鳥の巣箱をかけよう」観察会(千葉)
- 中旬 春の一般公開(千葉)

5月

- 上旬 公開講座「春の散策」(樹芸)
- 未定 公開講座「鳥の巣箱作りと観察」③(愛知)

6月

- 上旬 市民公開セミナー「樹海めぐり」(北海道)

エゾナキウサギ

ウサギ目 ナキウサギ科

学名： *Ochotona hyperborea yesoensis*

北海道演習林

日本では北海道のごく一部のみに分布するエゾナキウサギ。その名の通り鳴くウサギです。手のひらほどの小さい体でキチッ、キチッと力強く鳴きます。高温を苦手とするため、多くは山岳地帯の岩が積み重なるガレ場に生息していますが、ガレ場があれば低標高の森林内に生息することもできます。北海道演習林では大麓山(標高 1,459m)で確認されています。草本の葉や茎などを食べ、夏から秋にかけては岩の隙間に食糧を貯め込みます。これは貯食と言われ、冬眠をしない彼らの保存食となります。このような習性を持つエゾナキウサギですが、地球温暖化や森林開発の猛威に脅かされ、個体数の減少が懸念されています。

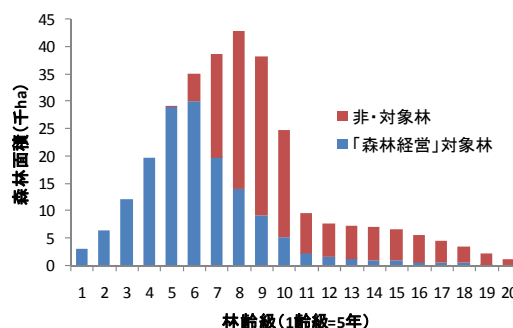


京都議定書における森林の炭素吸収量

千葉演習林 広嶋卓也

京都議定書は法的拘束力をもつ国際約束で、先進国の温室効果ガス削減目標を掲げるとともに、削減目標の達成に森林の二酸化炭素吸収量の活用を謳っています。日本の削減目標は、2008～2012年の約束期間に、二酸化炭素の排出量を1990年比で6%削減することで、森林吸収量の活用により最大で3.8% (1,300万炭素トン/年) の排出量を相殺することができます。

2005年の時点で日本の全森林吸収量は約2,400万炭素トン/年と推定されますが、削減目標に活用できる吸収量は、1990年以降に人為的活動の行われた森林に由来するものに限られるため、約1,000万炭素トン/年に止まります。人為的活動としては、土地利用の変化を伴う新規植林・再植林・森林減少と、「森林経営」が挙げられますが、日本は森林面積の変動が少ないため、実質的に「森林経営」が森林吸収量を決定する要因となります。「森林経営」の内容は各国の判断で決めることができ、日本の場合は、1990年以降に下刈り、間伐などの森林施業が行われた人工林と、法令に基づいて保護・保全されている天然林が該当します。筆者の推定によれば、毎年の森林施業面積が現状程度で推移した場合、約束期間中の森林吸収量は、1,300万炭素トン/年に若干届かず、造林補助金を拡充する、高齢級間伐を推進するといった追加的な措置が必要と考えられます。



林齢別にみた「森林経営」対象林の割合 (岐阜県人工林の例)

参考：日本国温室効果ガスインベントリ報告書 (2007), Hiroshima and Nakajima, J For Res 11: 427-437 (2007)

科学の森ニュース (UT University Forests News)

第41号 (No.41)

発行日 平成20年3月10日

発行人 下村彰男

編集人 山本博一

〒113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1

東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林研究部

TEL 03-5841-5497 FAX 03-5841-5494

E-mail mori2007@uf.a.u-tokyo.ac.jp